

平成28年度

淡路市・セントメリーズ市
姉妹都市提携30周年記念事業

淡路市友好親善使節団

海外派遣報告書



～ 目 次 ～

| | | |
|--|--------|----|
| ◆ 友好親善訪問の概要 | | 1 |
| ◆ 行 程 | | 2 |
| ◆ 訪問ダイジェスト | | 3 |
| ◆ 淡路市・セントメリーズ市姉妹都市提携 30 周年記念 | 廣田 利幸 | 7 |
| ◆ オハイオ州セントメリーズ市並びにミシガン州 ウェストブルームフィールド、デトロイト市を訪問して | 松本 英志 | 13 |
| ◆ 姉妹都市セントメリーズ市・ 姉妹図書館ウェストブルームフィールド図書館を訪問して | 中尾 雅規 | 16 |
| ◆ 淡路市海外友好親善使節団報告書 | 富永 登志也 | 20 |
| ◆ 姉妹都市セントメリーズ市及び姉妹図書館を訪問して | 加藤 妙子 | 24 |
| ◆ 世界を知る、自分を知る旅 | 徳梅 リカ | 28 |
| ◆ 心から感動した、国境を超えた人との繋がりに触れて | 岩本 和 | 32 |
| ◆ 姉妹都市交流 30 周年記念事業参加報告書 | 小田 美根子 | 37 |
| ◆ 姉妹都市交流協定確認書 | | |

〈友好親善訪問の概要〉

【期 間】 平成28年10月28日（金）～11月3日（木・祝） 7日間

【訪 問 地】 アメリカ オハイオ州 セントメリース市（姉妹都市）
 ミシガン州 ウェストブルームフィールド図書館（姉妹図書館）
 ミシガン州 デトロイト（在デトロイト日本国総領事館）

【使節団員】

| | 氏 名 | 所 属 |
|--------|--------|-----------------|
| 団長 | 廣田 利幸 | 淡路市教育委員会教育長 |
| 副団長 | 松本 英志 | 淡路市議会議長 |
| 団員 | 中尾 雅規 | 淡路市都市整備部長 |
| 団員 | 富永 登志也 | 淡路市企画政策部長 |
| 団員 | 加藤 妙子 | 淡路市企画政策部秘書広報課主査 |
| 団員(通訳) | 徳梅 リカ | NPO 法人淡路市国際交流協会 |
| 団員 | 岩本 和 | 市民代表 |
| 団員 | 小田 美根子 | 市民代表 |

【訪問の趣旨等】 アメリカ・オハイオ州セントメリース市とは、旧北淡町が昭和61年(1986年)に姉妹都市提携を締結して以来、30年の長きにわたり、青少年や成人の相互派遣を中心とした交流を積み重ねてきた。

今年度、提携30周年を記念し、両市より成人使節団の相互訪問を行うこととなった。まず、9月30日から10月3日の4日間、セントメリース市より3名の使節団が淡路市を訪問し、市長を含む市民の方々と交流した。そして今回、淡路市より、教育長、市議会議長をはじめ、一般公募から選出された2名の市民の方を含む8名で構成された使節団がセントメリース市を訪問し、友好を深める。

また、平成12年(2000年)に旧東浦町の図書館が、姉妹図書館提携を結んだミシガン州ウェストブルームフィールド図書館を訪問し、今後の交流促進を確認する。

【主な訪問先】

セントメリース市

姉妹都市提携30周年記念式典に出席し、確認書を交わす。歓迎行事では、両市民間の友好の絆を確認し合う。また、市内の中学校・高校、州立大学、博物館などを訪問し、施設の特徴などについて詳しい説明をいただく。

ウェストブルームフィールド図書館

これまでの交流を再確認し、相互の交流と情報交換の促進を図る。

在デトロイト日本国総領事館

オハイオ・ミシガン州管轄の在デトロイト総領事を訪ね、姉妹都市提携の経緯を説明し、今後の交流の進め方などについて意見をいただく。

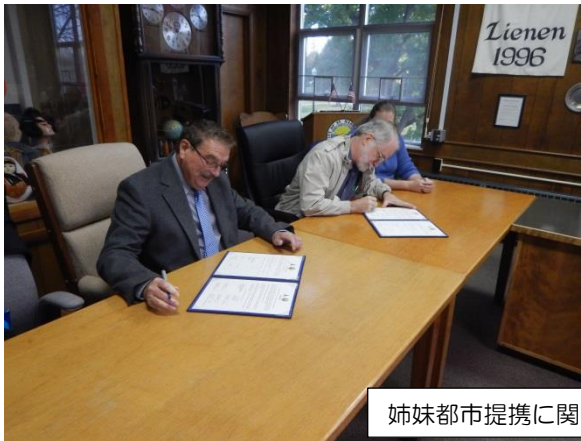


| 日程 | 行程 |
|-----------|---|
| 10月28日(金) | 大阪伊丹空港 → 羽田空港 → 成田空港 (日付変更線通過) デトロイト空港 → コロンバス空港 → セントメリーズ市へ |
| 10月29日(土) | オハイオ州セントメリーズ市 市庁舎歓迎セレモニー・確認書署名 市内視察(自然公園、宇宙博物館、州立大学、ロデオ観戦ほか) |
| 10月30日(日) | セントメリーズ市内視察 市施設見学、要塞跡地、神社、ビール醸造所などを訪問 姉妹都市30周年記念夕食会 |
| 10月31日(月) | セントメリーズ市内視察 中学・高校を訪問 デイトン空港 → デトロイト空港 ミシガン州ウェストブルームフィールド図書館へ |
| 11月1日(火) | 小学校(入学受入センター)、高校、病院を訪問 デトロイト市内視察 GMルネッサンスセンター、在デトロイト日本国総領事館を訪問 |
| 11月2日(水) | デトロイト空港発 (日付変更線通過) |
| 11月3日(木) | 成田空港 → 羽田空港 → 徳島空港 |

☆訪問ダイジェスト☆



10月28日（金）



姉妹都市提携に関する確認書に署名



ヘリテージ公園



宇宙博物館



ライト州立大学

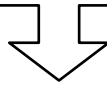
10月29日（土） セントメリース市







10月31日(月)午後 ウェストブルームフィールド図書館



11月1日(火) ウェストブルームフィールド 及び デトロイト市内



記念品を贈呈

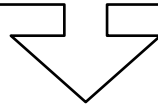


東浦図書館からのプレゼント



歓迎夕食会にて

11月1日(火)夜 ウェストブルームフィールド



11月2日(水) 帰国の途へ

廣田 利幸

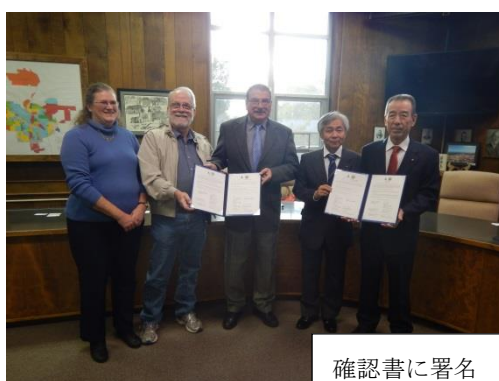
縁あって、この度、淡路市・セントメリーズ市の姉妹都市提携 30 周年記念の年に訪問させていただきました。個人的には、平成 11 年（1999 年）、二人の女子中学生、高校生を受け入れたことがあります。市と市の提携であり、人と人との交流です。また、そのことによって、教育、行政、観光、経済、文化等、さまざまな意味での交流が広がり深まっています。それから、ウェストブルームフィールド図書館にも訪問させていただき、心温まる歓迎を受け、関係づくりの大切さを味わってまいりました。

1 セントメリーズ市との交流

（1）歴史的経緯

セントメリーズ市との交流は、旧北淡町出身の元衆議院議員、原健三郎氏の仲介により、姉妹都市提携の提案を受け始まりました。昭和 60 年（1985 年）、淡路では「くにうみの祭典」のあった年、姉妹都市提携の議案を可決、昭和 61 年（1986 年）、姉妹都市提携が締結されています。平成 17 年（2005 年）4 月、淡路市合併後も姉妹都市提携を継承し、平成 23 年（2011 年）姉妹提携 25 周年を記念して、門市長を団長とした友好親善使節団が、セントメリーズ市を訪問し、姉妹都市交流協定書をサインされました。

この 30 年間で、多くの子どもたちや町の人たちが交流を続けてきました。互いに、関係をつくり、交流を深めてきました。市と市の関係づくりだけでなく、人と人にとっても、大きな財産であると考えます。



（2）歓迎式、歓迎夕食会

10 月 29 日（土）朝。歓迎式は、市議会（Council）の議場で行われました。パトリック・マクゴーウェン市長のごあいさつを受け、歓迎のお礼や今後の継続をお願いしました。会場には、議員の方々やホストファミリーのみなさんも参加いただいていたいました。大切な仕事として、淡路市・セントメリーズ市姉妹都市交流協定確認書に署名しました。

10月30日（日）夕刻。歓迎夕食会を催していただき、これまで淡路を訪問された方を含め、40名ほどのみなさんが集まっていたいていました。淡路市から記念の楯を贈りました。初めて訪れたセントメリーズ市のような空気に触れ、驚きとともに感銘を受け、温かいおもてなしに感動しました。青少年派遣団の若い人たちが、互いに交流を続け、刺激を受け合ってほしいと思います。

2 ウェストブルームフィールド図書館

(1) 図書館のこと

東浦図書館とウェストブルームフィールド図書館は、アメリカ政府の2000年、ミレニアムプロジェクトの時期に、政府公認の姉妹図書館となっています。当時の大統領夫人、ヒラリー・クリントン氏のサイン入り姉妹図書館認定の楯が贈られています。

この図書館は、ミシガン州、デトロイト市北西部のウェストブルームフィールド地区にあり、アメリカ有数の図書館で、2010年、「博物館と図書館サービスにおける全米栄誉賞」を受賞しています。この地区は、人口約64,000人、利用者は、約72,000人とされていました。毎日平均約2,600人が訪れ、年間300万冊近く貸し出されています。曜日によっては夜9時まで開いており、週74時間開館しています。運営は、街の人たちが行っていて、運営費は行政と寄付から成り立っており、年間約6億円もあると聞きました。もちろん音楽CD、映画DVD、電子本もあり、インターネットを通じて借りることもできます。子どもたちが楽しめる場所、学習する部屋、研修する部屋等、たくさんあり、活用されています。10kmほど離れたところに分館もあります。図書館の方は、「図書館は学び成長するところ、家族の憩いの場、生徒が勉強する方法を身につけ、生涯を通して学習者になる場所」と言われていました。図書館で働く人たちは、ボランティアもあり、10代の若者に対するチューターや1対1の個人教授もしています。

セントメリーズ市を訪問する淡路市の子どもたちが、今年もこの図書館を訪問して、心温まるおもてなしをいただきました。今後とも、交流を継続し、次に続く子どもたちにも、訪問を通して学んでもらいたいと思います。



ウェストブルームフィールド図書館



図書館内の様子

(2) 歓迎行事

10月31日(月)。クララ館長はじめ関係者のみなさんが、歓迎をしてくれました。ウェストブルームフィールド高校の生徒が演奏で迎えてくれました。そのあと、図書館の概要説明をいただき、対話をしました。

11月1日(火)夕方。夕食会で、プレゼントの交換をさせていただき、楽しい食事の後、お礼を述べさせていただきました。心温まるおもてなしに、心より感謝します。これからも、子どもたちがこの関係を通して、交流できることが本当にありがたいことです。

3 教育制度など

(1) セントメリース市(オハイオ州)

アメリカの教育制度は、幼稚園から高等学校を卒業するまで、13年間の期間が義務です。州によって、年齢や学年度開始が違うところもあるようですが、オハイオ州セントメリース市では、幼稚園入園5歳、学年度は、8月中旬以降に始まります。人口約8300人、市職員100名足らずの市です。

St Marys Primary School(K=キンダーガーテン~2年) Intermediate School(3年~5年) Middle School(6年~8年) High School(9年~12年)。訪問は、中学校・高校でした。7年前に校舎が新設され、玄関に向かって右が中学校、左が高校。これまで、小学校は6年生までだったところが、5年生までになり、中学校が7・8年から6年~8年になったようです。体育館が立派で、巨大な電光得点板、3000を超える移動観覧席。日本企業のムラテックオハイオ(MTO)の寄付があったということです。大きなホールでは演奏、ダンス発表会がありました。

病気等の事情で、オンラインで学ぶ生徒もいて、卒業もできるとのこと。日本のような国が定めた学習指導要領はないが、基準はあるとのこと。しかし、いつするかは自由。特別支援教育も、国の示すガイドラインがあり、学校に在籍し、必要に応じて、別の学校に通うようでした。給食はなく、カフェ(大きな食堂)で自由に選択し、カードで支払うこと、もちろんお弁当も可です。

スクールバスは、早朝、中学校・高校が先で、その後、小学校が使うことになっています。バスの手配者が一人いて、アシスタントももう一人います。自動車で送る親もいます。16歳で免許が取れ、高校生では、自動車で通学する生徒も大勢いました。



(2) ウェストブルームフィールド地区

この地区には、6 小学校、2 中学校、1 高校があります。幼稚園（キンダーガーデン）～2 年、3 年～5 年=Elementary School（小学校）、6 年～8 年=Middle school（中学校）、9 年～12 年（高校）。

訪問させていただいたのは、Sheiko Elementary School（シェイコ小学校）。児童数約 500 名。アラブ人、日本人、カリブ人などがいるということでした。日本人の親が、自分の英語力を高めることもあり、ボランティアによく来てくれるということでした。実際、教室で手伝いをされていました。この学校には、幼稚園よりも小さい子どもたちも通っていました。また、New Comer Center（ニューカマーセンター）が昨年でき、海外から来た子どもたちが学ぶ場も備えられていました。



もう一校、West Bloomfield High School（ウェストブルームフィールド高校）は、生徒数約 1750 名。校内には、スポーツ活動で優秀な成績を収めた選手やチームのカップや写真がかなりのスペースに展示され、たたえられていました。生徒は世界中の大学へ進学します。優秀な野球部の日本人生徒が、早稲田大学に進学したとのことでした。校長は、「人種もいろいろ、校内はまるで国連のようだ」と話されました。実際に、学校をまわらせてもらうと、様々な人種、個性豊かな子どもたちが学習していました。音楽室で迎えてくれた体格の大きい男子が、授業前に賛美歌を歌ってくれました。校長は、彼に「グッド ジョブ」と小さな声で賞賛を与えています。自ら選択させ、良いところを伸ばし、褒めていく教育、おおらかさを感じました。



4 訪問先から

(1) セントメリーズ市近くの施設

ニール・アームストロング宇宙博物館。昭和44年(1969年)、私自身、中学生時代、友人の家でテレビに目をこらして月面着陸を見ました。次の年、大阪万博に来た「月の石」であったかどうかわかりませんが、大切に展示されていました。ライト州立大学では、サメの化石の研究者の標本などを見せていただきました。グランドレイク(人口湖)＝巨大な湖を前に、広々とした景色、落ち着いた環境の中に大学がありました。ライトというのは、人類初の動力飛行に成功したライト兄弟にちなんだ名前です。

Fort Recovery (要塞跡地)、アメリカの歴史、1790年代、ネイティブ・アメリカンとの戦いの跡。悲惨なできごとでした。当時の砦や1800年代の建物を直し、今、地域の人たちが、町おこしに生かそうとしています。Maria Stein Relic Shrine (キリスト教会)、マリア像、聖フランチェスコ像など、広い空間に、きれいに配置されていました。お祈りをされている人もおられましたが、お土産売り場もあり、観光の施設でもありました。



(2) ウェストブルームフィールド地区・デトロイト市内

Henry Ford Hospital (ヘンリー・フォード病院)。一階入り口付近から、街のきれいな商店街のような作りでした。一般の人が自由に入れ、昼食をとることができます。病院の方からは、食や生活習慣により、病気の予防に心がけることを大切にしていること、入院されている人も、ゆったりとした気持ちで生活できるようにしているというお話がありました。ウェストブルームフィールド図書館の本が置かれ、自由に借りられるコーナーがありました。

デトロイトでは、GM Renaissance Center (ゼネラル・モーターズ ルネッサンスセンター)。デトロイト川西岸、対岸はカナダ、珍しくカナダが南になるところに建っています。7つの高層ビルと4つの低層ビルからなり、世界有数のオフィスビル街。中央の建物は地上230m、高層階からは、デトロイト市街やカナダの町がきれいに見えました。在デトロイト日本国総領事館では、和田充広総領事とお会いすることができ、管轄のミシガン州、オハイオ州の概要についてお話を伺いました。このころは、まだ、大統領選の行方ははっきりしないということでした。



5 旅を振り返って

デトロイト空港に降り立つときから、五大湖を囲む広大な土地、平坦な大地（平均標高200m 超）、アメリカという大陸の大きさを感じました。私たちが訪問する先は、オハイオ州の小さな町とこの空港の近くと言っても何十キロか離れたところの図書館でした。

しかし、巨大なアメリカという国を意識しましたし、日本では、日々、ニュースになる合衆国を少し身近に感じた旅でした。

日本からはるか遠く離れた町と豊かな図書館、心のこもった人たちの歓迎とおもてなし、ていねいな対応に触れて、姉妹都市、姉妹図書館という親密な関係の深さを感じました。これまでに直接訪問され関係をつくってこられた方々、これから関係をつくっていく子どもたちや市民のみなさんが、一層豊かな関係を結び、自身の生き方・考え方、生活にうるおいが生まれること、夢や希望につながりますことを願っています。

オハイオ州セントメリース市並びに
ミシガン州ウェストブルームフィールド、デトロイト市を訪問して

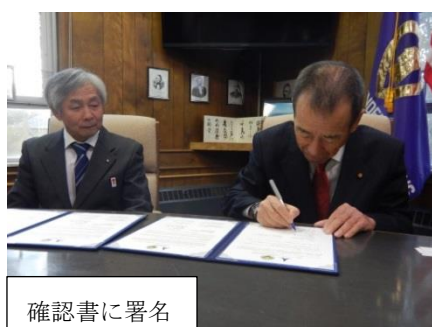
松本 英志

1 セントメリース市を訪問して

市内並びに郊外は広々として、清潔で良く手入れされており、美しい街並みであった。

市役所は非常にコンパクトであり、職員97名のうち、本庁勤務は部課長級のみの8名程度とのことである。他の職員については出先機関での勤務。また、議会も同様にコンパクトであり、議席は円卓並び、議員7名、週2回の議会開催であり、賛否は電光掲示板により表示されている。そして、議会室の隅々にまで本市に関わる物品類が展示されており、友好関係を大切にしてくれていることが良く理解できた。また、私たちが宿泊したホテルや、昼食を取ったレストランも市の補助金でリフォームされており、古い建物を大切にしていって日本とは違った面も見ることができた。

現市長は、前回選挙において、現職市長を破った1期目であり、実に1票差による当選であったと市長本人から伺った。現在は、公約実現に向けて、取り組んでいるところであると言われていた。市民との交流の場も終始和やかであったし、本年9月に本市を訪問された3名の方々には誠心誠意お世話になった。次回訪れる使節団の方々には最高のおもてなしをすべきであり、友好関係が末長く続くことを望む。そして、本市の多くの若者が、今後ともセントメリース市を訪れ、アメリカ人の度量の深さを学ぶことを希望する。



確認書に署名



議会の電光掲示板



市内の様子



両議長で談笑

2 ウェストブルームフィールド図書館を訪問して

最初に図書館を訪れたとき、学生たちの演奏により迎えられた。まず感じたことは、人口52,000人の市での図書館としては、非常に立派であり、広さはもとより、体制の違いにも驚いた。その一つは、運営が民間であること（ただし、市からの補助金6億94万円）。二つは、理事会があり、いろいろなことは理事会の協議で決定されること。また、館長は一般人であり、もちろん月給制。施設内には談話室、勉学専門の部屋などもあり、多くの学生たちが朝早くから、夜遅くまで利用していた。また、コンピューター一室の利用、サロンなども完備され、利用しやすい核となっている。

次に、分館も見学させていただいたが、本館の縮小版という感じであり、実に素晴らしい。本市の東浦図書館も、入口付近の一部がサロン形式となっており、雰囲気的には似たところもある。一方で、本市の津名図書館も、今後場所の移転、建替えなどがあるときには、一部サロニックな雰囲気も取り入れ、学生たちの勉学室（一般を含む）などの整備も図り、誰もが利用しやすい図書館の在り方を考えるべきである。いずれにしても、図書館に集う人々の表情は誠に豊かであった。



3 高校、病院、デトロイト市を訪問して

小学校やウェイトブルームフィールド高校、また、ヘンリーフォードホスピタルなども視察した。

ウェイトブルームフィールド高校は全校生徒1,750名、自由に伸び伸び学び、ある程度の自由さは認めているとのことであった。やる気のある生徒は大いに伸ばそうとする教育、参考にすべき点が多くあったように感じた。また、施設面では750人収容のホール、体育館、プール等あらゆる施設が整っており、魅力的な学校であった。勉学も優秀で世界中の大学へも進学しているとのことである。



高校生と一緒に



授業風景を見学

次に、ヘンリーフォードホスピタルは病院独特の臭いもなく、ショッピングセンター又はホテルのように感じた。一般客などは買い物や食事に訪れるとのことであり、病院内は非常な賑わいであり、先進的な病院である。我々の感覚では想像もつかなかった。

一度は破綻したデトロイト市は今完全に復興していた。街並みも美しく、新しい資本が入り、今市内は好景気とのこと。日本国総領事館では十分な意見交換もでき、有意義であった。



病院内の様子



対岸はカナダ

4 最後に

建国200年ほどのアメリカ合衆国であるが、見習う点が大変多いと感じた。一つは市内の至る所に国旗、州旗、市旗を掲げ、自らの町に誇りを持っていること。国歌を愛し、自らの国にプライドを持っていることが自然に感じられた。私たちは、島国で育った点、ある程度感じにくいと思うが、日本人としての誇りを強く持つべきであるし、国を愛し、国歌を愛する心をもっと持つべきではないのか。若者には、積極的に海外に目を向け、羽ばたいてほしいと思う。

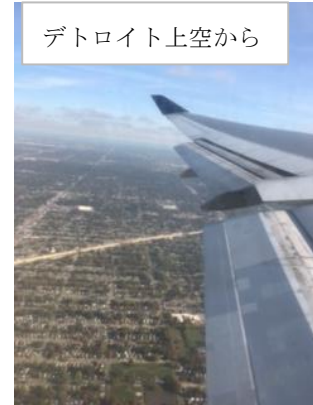
ともあれ、派遣期間中、大変お世話になった皆様方に対し、心より感謝を申し上げ、報告とします。

姉妹都市セントメリーズ市・姉妹図書館ウェストブルームフィールド
図書館を訪問して

中尾 雅規

成田空港を離陸して飛行時間約 11 時間 40 分デトロイト空港上空から見た景色にまず驚きました。

どこまでも続く平野、その中に広がる広大な農地、整然とした家屋、真直ぐな道路、アメリカ大陸の壮大さに感動を覚え、私にとってのセントメリーズ市姉妹都市提携 30 周年記念、ウェストブルームフィールド姉妹図書館交流の事業が始まりました。



1. セントメリーズ市訪問

(1) 市長を始め議会議員の皆様の温かい歓迎を受け 30 周年記念式典を終え市内を散策。

市役所に隣接し、メモリアルパークがある。5 大湖から先人が人力により建設された運河があり、広々とした公園には雑草は見当たらず芝で覆われた公園内は管理が行き届いていた。草の管理は、市の職員が行っているとのことであった。

また、古い建物を大切にしているようで、そのような建物により街の景観が保たれている。市内を走る道路の路側帯には区画線を引き、買い物等の住民の駐車スペースとして利用していた。広い道路であればこそ出来る技である。



(2) GRAND LAKE (人口湖) 周辺視察

2 日目は湖とその周辺の視察を行った。

グランドレイクは人口湖であり、13,500 エーカー (約 5,463ha) の面積がある。元々沼地であったところを堰き止め作った人口湖である。

車中からは広大な農地が広がっていた。大型トラクターとすれ違ったがタイヤの大きさは背丈より大きいと思われる。日本の農業は土地が狭いため出来るだけ手を加えて収穫量をアップさせるが、対照的に広大な耕作地で大型機械を用いるアメリカ農業との違いを目の当たりにした。この辺りの農産物は、主に大豆、麦、トウモロコシ等である。

その後、アメリカ合衆国の成立に至るまでの歴史が刻まれている、フォートリカバリーを見学した。インディアンとの銃撃戦を繰り返し、13州の土地を分配し50州に振り分け今の合衆国があるとのことであった。

この夜の夕食会では、フレンドシップセンターにて手作りの歓迎夕食会が開かれ多くの関係者に集まって頂き歓迎を受けた。

(3) 中学、高校を訪問

まず、最初に学校の概要を教育長、校長先生から説明を受けたが、校長先生、副校長先生はこの学校の卒業生であり、同級生であったとのことで、年齢が30代半ばと聞き日本ではありえない若さに驚かされた。

オハイオ州には公立学校が614校あり、この学校もセントメリース市立の学校である。12歳から18歳までの生徒【12歳～14歳（ミドル：中学校）・15歳～18歳（ハイスクール：高校）】が1つの学校として運営され、高校まで義務教育であり98%が高校を卒業している。

授業風景は自由そのもので、椅子の代わりに大きなゴムボールに腰かけて授業を受けている学生が数多く見られた。（体幹が鍛えられるのかな？）単位性、飛び級があり、個人の意思で自由に講義を受けている。

また、一般教養に加え、工業・農業系の施設もあり授業では設計図に基づき、おもちゃの車の製作を行っていた。

クラブ活動も活発で、体育館は日本の現地進出企業の寄付を受け建設したとのことで、観客席（3,000席）を備えた規模、設備とも非常に充実した施設であった。

また、市内全域から通学するため、16台のスクールバスを走らせ通学生徒の足の確保を行っている。

バスはスクールバスのみで使用されており、ドライバーは、送迎の空き時間（始業から、終業時間は7時25分～14時20分）には校舎の管理等学校作業を行っているとのことであった。また、16歳になれば車の免許が取得出来るため、駐車場には、多くの生徒の車が駐車されていた。

この日は、セントメリースとお別れをし、デイトン空港からデトロイト空港（約1時間）を經由しウェストブルームフィールド図書館に向かう。



授業の様子



スクールバス

2. ウェストブルームフィールド訪問

(1) ウェストブルームフィールド図書館訪問

予定より30分遅れの16時30分ウェストブルームフィールド図書館に到着した。

この図書館は、平成11年米国ミレニアムプロジェクトにより提携の打診があり、平成12年東浦図書館と姉妹図書館提携がスタートし、2011年から毎年、当市の友好親善使節団が表敬訪問し交流を深めている。

ここでも、温かい歓迎を受け、学生による生演奏で迎えられた。感激である。

壁には、淡路市からの表敬訪問時の写真が貼られていた。子供たちの楽しそうな表情が印象的であった。日本ででの行事は挨拶、乾杯等始まりの区切りがあるが、アメリカではいつの間にか始まっていたとの感じでありここでも同様であった。

歓迎行事後、館内の案内をして頂いた。職員数120名、本館の床面積は7,000平方メートル、約10キロメートル離れたところに分館がある。

1日平均2,600人が利用し、年間300万冊を貸し出しているとのことであった。

また、オンラインの利用により1年365日24時間の利用が可能となっている。

全米で12,000館以上ある中で5館しか選ばれない最も栄誉のある、図書館サービスにおける栄誉賞を受賞した図書館でもある。

通常の図書館施設に加え、現在、仲間と少人数で利用できるガラス張りの小部屋の増設工事を行っていた。

また、幼児が楽しく利用できるよう季節に応じた飾り付けにも気を配っており、自宅でタブレットが出来ない子供達が図書館で利用できる環境を提供し、誰もが利用しやすい施設を目指している。



(2) 小学校 (Sheiko Elementary) 見学

生徒数500人、アラブ系、日本人等、も通学しており、英語が解らない生徒のために特別教室があり、先生のほか補助の指導者が付き英語教育を行っている。



父親の転勤により、授業を受けている日本人（日本人3%）児童が見受けられた。

（トヨタ、㈱DENSO等の企業が多い）

(3) 高校 (West Bloomfield High School) 見学

生徒数1,750名人種も様々である。

この高校でも校長先生が若々しかった、何歳から校長しているのか定かでない。話から逆算すると20代半ばか、非常に明るく爽やかな学校長でありました。

学校の教員も皆が爽やかで、生徒たちも明るく、世界中の大学に進学し優秀な生徒を

排出している。



クラブ活動も活発で、優秀な成績を収めている。

教員の殆どが修士課程（大学院）修了者で、授業風景も自由な印象を受けた。

※ 運動クラブの購買があり、校長先生の計らいか、自由に好きなものをプレゼントすると言っていたが、高校のネーム入りのシャツ等遠慮なく頂き記念になりました。感謝！

(4) 病院（Henry Ford Hospital）訪問

健康を保つ（予防医学）事を目的とし、2009年建設されたベッド数191床の病院である。

患者のストレスを感じさせないよう落ち着いた雰囲気を出すため、1階通路は商店街のような雰囲気であった。

3. 在デトロイト日本国総領事館を訪問

世界の主要都市に設けられている総領事館は、旅券（パスポート）の発給や出生届などの証明手続きといった海外で生活する日本人のために設置された窓口であり、アメリカには総領事館が14か所ある。

デトロイト総領事館はオハイオ州とミシガン州を管轄し、姉妹都市関係はミシガン州で28市町、在留邦人数13,800人余り、オハイオ州では15市町、在留邦人数13,900人余りになる。

4. おわりに

セントメリーズ市の関係者の皆様、ウェストブルームフィールドの皆様をはじめ関係者の皆様このたびの訪問に際し、親切丁寧な対応をいただきありがとうございました。感謝申し上げます。

グローバル化が進展する中、共通の倫理観や価値観を確認するためには、実際に異文化・文明に接触する機会を増やすことが重要だと思います。これからもこうした国際交流、特に若い世代の交流の進展が、両市にとって有意義なものと考えます。

《30年の重みを痛感した訪問》

姉妹都市、米国オハイオ州セントメリーズ市。30年前は、「セントメアリース市」という呼び方をしていた通訳の方もおられたことを記憶しています。私は今回で平成16年4月以来の3回目のセントメアリース市訪問となりました。旧北淡町時代に、担当者として、提携15周年と20周年の派遣団の一員（担当）として参加しました。やっぱり、現地で通訳としてお世話になったムロテック・オハイオ・コーポレーションの森田剛志さんが、「セントメアリース市」と発音していたことで、「やっぱり」という気持ちになりました。いつの間にか「セントメリーズ市」で確定してしまったことを不思議に感じました。

思い起こせば、旧5町の合併が平成17年4月1日と決定したのを受けて、前年の平成16年の秋に当時の市長、クレイグ・フリーウエルト市長が来日し、当時の北淡町国際交流協会の石井健二郎会長と共に、他の4町を訪問し、「合併後の姉妹提携継続」についてお願いしました。合併協定書では、「姉妹都市等（海外）については、現行のとおり新市に引き継ぎ、新市において調整する。」という取扱いになっていました。4町の町長や代理の方々は、笑顔での対応をしてくれましたが、継続に関しての太鼓判の確約はいただけなかったと記憶しています。その日から、もう12年の歳月が流れました。あの場に同席した私にとっては、何とも言えない、感無量の訪問になりました。

12年ぶりのセントメリーズ市の人々は、以前と同様に温かく迎えてくれました。会う人皆に手を振っても手を振って答えてくれました。また、公式行事、イベント、名所視察、学校訪問、どれをとっても全て前回と変わらず、心のこもった温かい持て成しの気持ちが伝わってきました。そして、米国の田舎町ののどかな風景も、まったく変わっていませんでした。市役所がある昔ながらのメインロード。整えられた芝庭を持つ一戸建ての住宅。個々の家々を結ぶ広い道路には、雑草の姿はまったくありません。今回常に同行していただいたスーザン・クロッティ産業コミュニティーマネージャーに聞くと、各々の庭等の手入れをしないと罰則がかけられる決まりがあり、皆がそれを守っているということでした。



今回の公式行事としては、2日目の朝9時からの市役所での「歓迎式」と3日目の夜6時30分からのフレンドシップセンターでの「歓迎夕食会」がありました。歓迎式の会場には、昔からの懐かしい顔ぶれもありましたが、初顔の方々も数多く見受けられ、12年間のブランクを感じました。ただ、その中には、タッド・フリーグル元産業・地域開発マネージャーの姿がありました。タッドは、私と同様にこの国際交流事業の担当者として苦労した仲間のひとりでした。そして、今や市議会議員の立場でこの歓迎式に出席していることに驚き、喜びました。思わず駆け寄り、握手し、ハグしました。歓迎夕食会には、夫婦仲良く出席されていて、わずかな時間ですが今の現況を話しました。タッドは4年ほど前に市を退職し、中古の家を修理等して販売する不動産屋のような仕事をしながら議員活動をしているとのことでした。「トシ（私のこと）は、いつまで市に務めるのか」とか、「リタイヤ後は何をするんだ」と聞かれたようですが・・・・・・・・・・。とにかく、楽しい時間を過ごさせていただきました。



昔の同僚：タッドとの再会



市役所前で市長の愛車と共に

1日目の宿泊は、夜も晩くの到着ということもあって、団員8人そろって市内のホテル「クオリティ・イン・セントメリース」に宿泊しました。最近、市が補助をしてプール等が増設され、改装されたとあって、以前のモーターからそこそこ立派なホテルに生まれ変わっていました。そして、ここでもすごい「おもてなし」がありました。フランシス・パイリス元産業・地域開発マネージャーの名前で、団員8人の部屋にチョコレートなどのお菓子をプレゼントしていただいていたのでした。これまたびっくりの感動でした。残念ながら、ちょっとした行き違いがあり、フランシスとは会うことができませんでした。残念。

2・3日目には、前回、前々回と同様、クレッグ・ノーブル氏宅にホームステイさせていただきました。2日目の夜、9時前にスーザンに案内されて、ノーブル家に到着しました。ご夫婦そろって、笑顔で迎えてくれました。ノーブル氏は67歳、弁護士で市の法律担当役員、奥さんのクリスさんは中学校の先生を退職した顔良し・スタイル良しの美人系の方です。お二人は中学、高校の先輩後輩にあたるそうです。奥さんは、以前から言葉使いも態度もキリッとして、アメリカ女性の典型的な感じがしました。新しいキッチンで作っていただいたブレイクファーストの目玉焼きはおいしかったです。

お邪魔した邸宅は、前回からと比べると、1階のリビング・キッチンをリフォームし、奥にご夫婦の寝室、バス等を増築されたようでした。案内された部屋は、2階の一番奥の

リフォーム前はご夫婦が使用されていたバス、トイレを備えた部屋でした。2階には、他に現在はアメリカ空軍幹部の長男の部屋、ニューヨークにいる次男のジョナサンの部屋、ゲストルームの合計4部屋とゲストルーム用のバス、トイレがあります。現在は、全てがゲストルームになっているようです。

3日目の朝、ノーブル氏宅を少し早く出て、ノーブル弁護士事務所へ案内してくれました。事務所はメインロード沿いの中ほどにありました。この事務所は、お父様が弁護士をしている時からの事務所であること。自分を含めて5人のスタッフで事務所を運営していることなどを説明してくれました。事務所のゲストロビーには、日本の友人から送られたプレゼントの数々が飾られ、自室の壁には、北淡町と淡路市からの友好市民章が額に納められ、掛けられていました。さすがに、30年間の長きに渡る歴史を感じ、ノーブル氏の友好親善を深めるための功績の大きさを改めて感じました。



今回は、多種多様にわたったイベントや場所に案内していただきました。市の運動公園施設でのパターゴルフ、化石の研究に秀出しているライト州立大学、暴れ牛に乗るロデオ興行、オハイオ州の成立ちや歴史をたどることが出来る現地インディアンとの戦いのための要塞跡、中学・高校の実質的一貫校などに案内、紹介、参加させていただきました。

今回のセントメリーズ市の滞在は、3泊4日ありましたが、1日目は夜に着いて、4日目は午前10時30分に市を離れるという短い期間でしたが、スーザンの「グッド ジョブ」により、3回目の私にも新鮮なセンメリを堪能することができました。

《新たな友好関係に感謝》

4日目、予定の時間から少し遅くなった夕方4時30分過ぎに、重厚な煉瓦に包まれた風格のある建物、ミシガン州ウェストブルームフィールド図書館に到着しました。図書館の入り口を右に案内されると、セレモニーホールのような部屋で、タキシードに身を飾った6名の男女によるクラシック音楽の生演奏で出迎えていただきました。流石に、全米有数の住みたいまちに高ランクされる図書館のもてなしに感心した次第です。

この図書館の特徴について色々と質問した内容をまとめてみます。ウェストブルームフィールド市の人口は、約52,000人。図書館サービス人口は、約72,000人。隣接の市や市

内勤務の方々により増。図書館費は、市から年間約7億円。他のグループ団体からも支援あり。職員は約100人。市の職員はゼロ。運営は選挙で選ばれた協議会委員の合議で行われているとのことでした。ある時、このまま市政に図書館を任せては予算的にも活動的にも、前へ進んで行けないという考え方が広まり、有志によって協議会を立ち上げ、市との折衝により市民運営、利用者運営を目指した結果ということのようです。実に、すばらしい市民パワーです。

また、コンセプトも広がりがあります。図書館は本を借り、本を読むための施設だけではなく、人々が集まる場所。親と子供が遊ぶ場所。母親同士が語らう場所。学生が勉強する場所。各々の趣味を広げる場所。まだまだ、前へ進もうとしているクララ館長の言葉には、熱いものを感じました。そして、スタッフの皆さんが自分たちの図書館に大きな誇りを持っていることも良くわかりました。

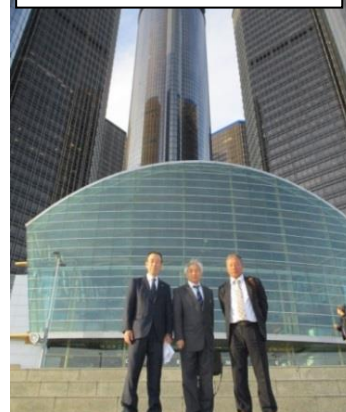
5日目の午前中、クララ館長さんたちの案内で、ウェストブルームフィールド市内の小学校、高校、病院を見学、訪問しました。小学校では、在日本企業の子供たちの笑顔が数多く見受けられ、英語にまだ慣れていない子供たちの特別センターも開設されていました。学校自体が、どのような国からもウェルカムという姿勢が大切であると感じました。また、ウェストブルーム高校では、様々な人種・地域生まれの学生1,750人が集い、案内してくださった校長先生からは、「国連ビルに來られたようでしょう」という紹介がありました。みんな自由で、生き生きと、何かの目的をもって、勉学、スポーツに励んでいました。また、ヘンリー・フォード病院は、フォード財団により作られた4つの病院の一つで、まったく病院らしくない病院ということで建設され、病気を治療するというよりも、健康を保つための病院というコンセプトで運営しているということで、日常の食事や運動、精神的な面のフォローを重点においているとのことでした。

バランスボールを体験



午後は、デトロイト市内へ案内していただき、GMルネッサンスセンターの見学ツアーに参加しました。やはりGMの本拠地(本社)だけあって、スケールの違いに感心しました。次に、この巨大なGMルネッサンスセンターのビル群に事務所を構える在デトロイト日本国総領事館を訪問し、和田光広総領事と面会する時間をいただき、約1時間懇談させていただきました。団員からは、今回の渡米の目的やオハイオ州・ミシガン州の感想などをそれぞれの立場から申し上げました。和田総領事からは、米国民の普段の生活習慣や考え方などについてお話があり、あっという間に時間が過ぎました。

GMルネッサンスセンター



この使節団の一応の占め括りとして、最高の場所、そしてある意味日本を代表する方との意見交換は団員の脳裏に残ったものになったと思います。

姉妹都市セントメリーズ市及び姉妹図書館を訪問して

加藤 妙子

アメリカ合衆国オハイオ州セントメリーズ市との姉妹都市交流を締結して30周年を記念し、10月末に使節団の一員としてセントメリーズ市を訪問することになりました。私は、事務局として、慣れない土地で使節団が安全かつスムーズに行程をすすめることができるよう準備をすることになりました。

かつて、中学生時代に青少年海外派遣事業の参加経験はあるものの、英語力や海外渡航経験の少ない私にとって、この準備作業は不安でいっぱいでした。

しかし、本年9月30日～10月3日に、セントメリーズ市友好親善使節団をお迎えしたことで、私の不安は和らぐことになりました。使節団の受入は、国際交流協会の方々をはじめ、多くの方と協力しておこないました。お迎えした使節団員3名は、過去にも淡路市への来訪経験があり、視察先の選定には頭を一番悩ませました。十分なおもてなしができるか心配でしたが、使節団の方々との交流が始まると、彼らは、私のつたない英語を一生懸命理解しようとしてくださいました。私も、手振り身振りを交えながら、思い切っ**て**ぶつかってみると、意外にコミュニケーションがとれました。

結局、英語を話せるかどうかではなく、楽しんでもらおうという気持ちが最も大切であることがわかりました。

期待と不安の中で出発の日を迎え、飛行機を乗り継ぎ丸一日かけてセントメリーズ市に到着しました。翌日、市役所において、市長のパトリック氏をはじめ、市議会議員・姉妹都市交流協会会長立会いのもと、「淡路市・セントメリーズ市姉妹都市交流協定確認書」を締結することができました。これまでの交流を通して積み上げてきた両市の信頼関係を礎として、友好関係を更に推進することを約束しました。



無事に7日間の訪問を終え、ほっとすると共に、今回の訪問を通して3つのことを感じました。

まず1つ目は、人々の優しさとあたたかさについてです。

私が困っている場面では、必ずといっていいほど誰かが声をかけて助けようとしてくれました。たとえば、飛行機の中で手荷物を入れる棚がいっぱいで荷物を入れられずにどう

しようか迷っていると、近くの席の人が英語で「こっちが開いているよ」と声をかけてくれました。それだけでなく、重い荷物をさっと持って入れてくれるのです。早口の英語で声をかけられたため、一瞬戸惑いましたが、すぐに状況が理解でき、なんとかお礼を言うことができました。もし私だったらこんなにスマートに人を助けることができるだろうかと思わず考えてしまいました。

他にも、町を歩いていると色々な人が声をかけてくれます。” Can I help you?” ” Have a nice day!” などほんのちょっとした一言です。でも、この一言があるだけで、困った時に尋ねやすかったですし、ただすれ違っただけの人との間でも笑顔になることができました。

日本では見知らぬ人、ましてや外国人にいきなり声をかけることはあまりありません。困っているときも、そうでない時も気軽に声をかけあう文化に優しさとあたたかみを感じました。

2つ目は、旧北淡町時代から現在に至るまでの交流の歴史の重みについてです。

たとえば、セントメリーズ市議会には、本市から送られた品々が所狭しと展示されています。また、Heritage Park (ヘリテージ公園) には姉妹都市締結記念の石碑だけでなく、日本庭園と壁画がありました。壁画には、さりげなく淡路市章が描かれており、姉妹都市として淡路市を大切にしてくれているんだなあと思いました。



そしてなにより感激したのは、現地で迎えてくれた人々でした。Friendship Center での夕食会では、過去に使節団として淡路市を来訪した方々から、花さじきに行って風景が美しく感動したこと、ホームステイ先の家族との思い出話などをたくさん聞かせていただきました。英語の苦手な私にもわかりやすいように、ゆっくりと話してくださり、思い出の写真などを交えて会話がはずみました。



市の顧問弁護士でもある Kraig Noble 氏からは、30年前に初めて姉妹都市提携をした際の町民章を見せていただきました。Noble 氏は、合計5枚もの市民章を持っているという話を聞き、「10枚集めればいいことがあるよ」などと冗談も飛び交いました。

また、ホームステイ先の娘さんの部屋の一角には、今までの青少年派遣団員が訪問した際の思い出の名刺や写真を、コルクボードいっぱいにつけて、大切に飾っていました。

出会った方々は皆、遠く離れていても淡路市のことや、そこで出会った人々のことを大切に思ってくれていることがひしひしと伝わってきました。



北淡町民章を自慢する Noble 氏



コルクボードいっぱいの名刺や写

3つ目は、教育機関や図書館の訪問を通して、学ぶべきことが多いということです。

中学・高校を訪問して、まず施設が充実していることに驚きました。たとえば、教室には電子黒板が採用され、それを使った授業を見学させていただきました。また、体育館には3700名分の可動式観客席が設置されていました。その立派さにも驚きましたが、地元企業の寄付により設置されたと聞いて更に驚かされました。官民一体となって地元の子供達のために何ができるのかを考えて、支えていこうという精神に感動しました。



中学・高校の体育館を見学

東浦図書館の姉妹図書館であるウェストブルームフィールド図書館では、本の貸し出しだけでなく、地域のコミュニティーとして地域の人々から親しまれ、毎日平均2,600人もの人が訪れています。そして年間300万近くの書籍類が貸し出され、利用者は本やオーディオブック、雑誌、映画、音楽のデジタル版をダウンロードすることも可能と聞き、驚きました。プレイルームやスタディールーム、人形劇や絵本の読み聞かせなどができる小さな舞台まであり、ディスプレイも季節ごとに変更されているそうです。様々な年代の人に活用されており、皆さん一様にゆったりと時間を過ごされていました。



図書館内を見学

あっという間の7日間でしたが、日本にいただけでは気付かない様々なことを感じ、経験することのできた毎日でした。今回のセントメリーズ市訪問に際して、仕事を休んでボランティアで市内視察の案内をつとめてくれた Jacquelyn さんは、青少年派遣団員として淡路市を訪れたことをきっかけとして、日本文化に興味を



を持ち、大学で日本語を専攻したそうです。年が近いこともあり、慣れない土地で困ることが無いようにと、きめこまやかなサポートをしてくれました。

彼女だけでなく、これまでの30年間の交流を通じて日本や淡路市への理解を深め、大人になってから再び淡路市を訪問してくれる方や、ホームステイ先のご家族と派遣事業終了後も交流を続けている方も多くいらっしゃいます。訪問中、セントメリーズ市長をはじめ、多くの方々に歓迎していただきましたがそれは、これまでの30年間の交流の積み重ねがあつてこそだと強く感じました。青少年海外派遣事業として、若いうちに海外を訪問することは、多様な価値観・文化に触れ、多くのことを学ぶ良い機会になると思いました。

最後になりましたが、姉妹都市提携30周年記念事業の友好親善使節団員としてセントメリーズ市およびウェストブルームフィールド図書館を訪問する機会を与えていただき、感謝しております。今回の訪問を通して感じたことを大切にしながら、今後の交流事業の派遣と受入を更に充実したものにできるように活かしていきます。

世界を知る、自分を知る旅

～セントメリーズ市・ウェストブルームフィールド図書館を訪問して～

徳梅 リカ

今回のセントメリーズ市・ウェストブルームフィールド図書館訪問について、まず、最初にお礼とお詫びを申し上げたいと思います。

これまでにセントメリーズ市からの青少年の受け入れなど、8年ほど前から交流の機会をいただき、またその後も淡路市国際交流協会の事務局員としてホームステイの手配や訪問時のお手伝いをさせていただいてきました。

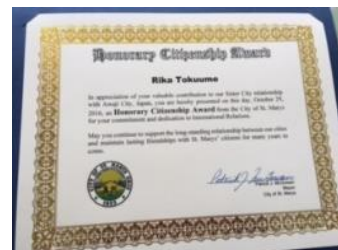
「セントメリーズ市ってどんな所なのだろう?」「ウェストブルームフィールド図書館が淡路市の東浦図書館と姉妹図書館ってどういうこと?」・・・そろそろ私も訪問してその実態を見て来なくては、という気持ちが湧いてきていました。

そんな気軽な考えで、淡路市国際交流協会からの推薦という事で参加を申し出ました。その時点では、その申し出＝通訳に立候補、という意識もなく、気が付いた時には自分の無能さを忘れ、恐れ多くも通訳を引き受けざるを得ないという状況でした。そしてそのことを一番に見抜いた市長はじめ皆さんの予想通り、30年の姉妹都市交流において史上最低の通訳であったことを今更ながら反省しています。



まず長い旅路を経て到着の翌日、セントメリーズ市役所への表敬訪問時、淡路市からの訪問団代表のスピーチでは練習不足丸出しの通訳、セントメリーズ市長のスピーチに至ってはどうやって日本語訳させていただいたのかも記憶に残っていません。

ただ、よかったことも多くありました。その一つは以前淡路市から贈った百人一首の和歌が上下逆さまに飾られているのを発見した時のこと。正しい方向に戻したところ、「助かった。恥をかかところだった。」とセントメリーズ市長がお礼を言うてくださったことです。そのお茶目な笑顔に緊張も解け、ほっとさせられました。



また、私たちを大歓迎してくださった市役所職員さんをはじめ市議会議員の方々、お世話くださった協会のみなさん、以前淡路市へ来られた青少年のご家族やホストファミリーとの出会いも、遠くの親戚に会ったような懐かしく安心した気持ちにさせてくれるもので

した。



その後セントメリーズ市郊外では、なんの下勉強もなしに行ったニール・アームストロング博物館でも冷や汗。職員さんが立て板に水のごとく話される一方で、私の方は全くチンプンカンプン。ロケットの機能や長さの単位、飛行士が着る宇宙服の素材や重さなど説明を聞いても単位の換算などほとんどできません。

翌日の訪問先、アメリカ先住民と入植者との戦闘時に作られた要塞跡でも、その歴史認識ができないままいい加減な説明しかできません。自分の学力や知識の薄っぺらさにあきれられるほどでした。



それでも私は強運の持ち主で、その辺りはすべて地元の日本企業に勤める日本人の有能な若手社員・森田さんに通訳を押し付けることができました。この場を借りてお礼申し上げます。

一方で後に訪問したカトリック教会ではこんなこともありました。信者でもないにもかかわらず自分の知識をフル活用し、夏に淡路市を訪問され今回も同行してくれたジャッキーさんのお話を使節団の皆さんに多少は説明することができ、心の落ち着きを取り戻すことができました。そこに祭られた聖人たちに感謝、ジャッキーさんに感謝です！



そこでやっと気が付いたのは、いろいろな分野に興味を持ち学習しておいてこそ人に説明したり通訳したりできるのだという当たり前のことでした。自分の楽しみのためだけでなく、周りの方の助けになりたいのであれば、もっともっと学習や努力が必要であるということ、身をもって知ることができただけでも、この旅は修業の一つであったかも知れません。



ウェストブルームフィールドへ移動してからはプロのすばらしい通訳者、鈴木さんがついてくださり、随分と気が楽になりました。そして、図書館のあまりのすばらしさに今度は私自



身がたくさん質問をしたくなりました。



子どもや学生だけでなく大人の間でも活字離れが進んでいますが、これは日本に限ったことではないと思います。そんな中、規模の大きさや書物の多さだけではなく、全米トップ5に入るといわれる理由、人々に愛される理由は何なのか……。

得意分野ではなくても興味のある分野、それこそ頭の中をぐるぐる、あらゆる語彙をぶっ放して図書館職員さんに聞いて回ろう！くらいの勢いでしたが、図書館に入った瞬間から「もう質問はいらない。」という気がしました。訪問や視察ではなく、一人の住民として、もっという昔にタイムスリップして子どもの目線で見回した時にドキドキワクワクがたまらない！「さあ今日はどこでおもしろいものを見つけようかな？本もいいし、おもちゃもいいな、お話しは何時からかな？」図書館というよりもアミューズメントパーク、一日中いたくなる世界が広がっていたのです。帰るのがイヤと泣く子がいるというのにも納得できます。

さて、話は2日目からのことに戻りますが、ホームステイ先ではお客様というよりも長年の友達のように温かく迎えていただきました。昨年淡路市を訪問したブラッド君とお父さんのマイクさんの家ですが、私たちのために子ども部屋を開放し、朝早くからご夫婦で朝食を準備してくれました。いっしょに交流会に出かけたり、折り紙をしたり、おしゃべりは深夜まで終わりません。そしてお別れ時には今度は家族の女性メンバー、お母さんのジェニーさんを娘さんたちが淡路市を訪問すると約束してくれました。



すぐには実現しなくても、「いつかまた会える。会いたい。」という気持ちがあって交流が続くのかも知れません。そんな風に30年の交流が続いて来たのでしょうか。この30年の間にこういった出会いと再会が繰り返されてきたのだと思い浮かべ感慨深い思いに浸りました。そして、そこに今まで関わって来られたた何十人、何百人ものもの職員さんやボランティアの方々への感謝の念を深めずにいられませんでした。

今回に関しても、淡路市側の担当職員さん、淡路国際交流協会担当者にはもちろん、セントメリーズ市のスーザンさんをはじめ多くの職員さん、議会、交流協会のみなさんに大変なお世話になり、心よりお礼申し上げます。

ウェストブルームフィールドにおいても図書館だけでなく学校訪問、デトロイトまで幅を広げて総領事館訪問など充実の行程を組



んでいただいたことに図書館員、図書館友の会みなさまに感謝の気持ちでいっぱいです。

この旅の最後の夜に夕食会を開いてくださったウェストブルームフィールド図書館のクララさんの言葉が心に残ります。

「図書館の規模は違っても、私たちは淡路島の東浦図書館と姉妹都市でいられることを大変うれしく思っているのよ。淡路市や東浦図書館から贈られた多くの素晴らしい贈り物のおかげでウェストブルームフィールドの人々に日本の文化を紹介することができている。淡路島を訪問してその自然や伝統文化が大好きになった。」



笑顔の素敵なクララさんの言葉に胸が熱くなり、この旅に参加できてよかったと思った瞬間でした。



いい加減な通訳しかできず皆さんのお手伝いどころか失敗続きの私がいうのもなんですが、改めて思うのは気持ちや心さえあればコミュニケーションの手段はたくさんあるということです。市民代表の小田さんがホームステイ先で若いジェシーちゃんとキャーキャー言いながら遊ぶ姿、岩本さんが身長 190 センチもある高校の校長先生とバスケットボールを楽しむ様子、どれも言葉を越えた素晴らしい笑顔のコミュニケーションでした。

もしかしたら、私はこれを機に職を失うのではないかという懸念もありますが、それと引き換えにしてもよいくらいの素晴らしい経験をさせていただきました。いやいや、やっぱりこの経験を生かしていかなくはいけませんね！みなさま、本当にありがとうございました。

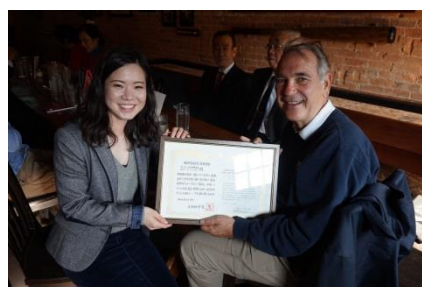
ある日、何気なく見ていた神戸新聞の淡路欄に St. Marys 市への訪問の募集記事を目にしました。私は今までアメリカはもちろん、海外へは一度も行った事はありませんでした。しかし私の祖父が生前旧北淡町の町長をしていた時に、ホームステイとして受け入れた時の楽しかった思い出があったので、「アメリカの St. Marys」に対して特別な思いがありました。

祖父はいつも忙しそうにしていた上に、私が5歳の頃に他界したため、祖父との思い出は十分にはありませんでした。唯一よく覚えている思い出が「アメリカの St. Marys」の人たちと一緒に食卓を囲みワイワイ過ごした事です。「じいちゃんの事、知ってる人はおるのかな?」「じいちゃんが写真に残してきたこの景色を私も自分の目で見たい。」その気持ちだけで応募しました。そこから私のアメリカへの旅が始まりました。

St. Marys 市へ行きたい気持ちを家族に伝えると、もちろんビックリしていましたが、すぐに納得してくれました。締め切りまでに応募用紙を提出し、後日案内が届き、派遣団として行かせてもらえることになったものの…私は英語が話せない事にそこでようやく気付きました。中学・高校の英語のテキストを出してきて「今から文法かぁ……。今からの単語を覚えたらええんやろ?」サッパリ分からず時間だけが過ぎ、少し焦りを感じていました。幸いな事に私は学生時代、夢中になっていたバスケットを通して出来たアメリカ人の友人がいたので相談しました。すると、「この会話も出来ているし気持ちがあれば大丈夫。人間だから伝わるよ。」と背中を押してくれました。そのお世辞のような言葉に変に納得した私は気持ちだけを持って、独学のフィーリング英会話でアメリカへ行く決意を固めました。

10月28日(金)待ちに待ったこの日がやってきました。東浦事務所で団員の皆さんと合流し、伊丹空港から羽田空港、バスで羽田空港から成田空港まで向かいました。成田空港からデトロイト空港まで向かい、乗り継いでコロンバス空港を目指します。コロンバス空港は St. Marys の方々との待ち合わせ場所でした。大きな車でお迎えに来てくださりました。それぞれの車へ乗って夕食場所へ向かいました。初めての海外飯はギリシャ料理でした。ギリシャ料理という言葉に何も想像が付きませんでした。数種類のハーブや香辛料を使ったとても美味しいお料理でした。その後はホテルへ移動しました。一人部屋と言ってもさすがアメリカ!と思うような大きさのベッドでした。日本とは違うシャワーの使い方に苦戦しましたが何とか次の日の朝を迎えることが出来ました。

日本時間での10月29日から31日のお昼までは、St. Marys 市の方々と過ごす事が出来ました。限られた時間ではありましたが、St. Marys 市の様々な場所へ私たちを案内してくれました。初めに市役所を訪問させてもらい、歓迎式がありました。旧津名郡北淡町から淡路市と St. Marys 市の長年の親交の



深さを感じる事が出来ました。

市役所には日本の着物や折り紙、手芸品などたくさん飾られていました。「中には君のおじいちゃんの写真もあるよ。」と市の顧問弁護士をされている Noble さんが教えてくれました。また、昼食の時には祖父が Noble さん宛に書いた国際友好北淡町民章というものを持って来てくれました。彼は私の祖父の事をよく知っていたそうです。わざわざ部屋に飾っていた物を持って来て私に色んな事を教えてくれました。本当に嬉しかったです。祖父の事を知っている人に会えて良かった、と心から思いました。初めてお会いする方なのに不思議な感じがしたのを今でもよく覚えています。

St. Marys 市滞在中は Bayham さんというご家族が加藤さんと私のホストファミリーでした。Bayham 家の長女の Jacquelyn さんという女性が常に一緒に行動してくれていた事や年齢が近かった事、それに彼女は日本語が少し話せたので何の不自由もなく過ごす事が出来ました。一番驚いたのは彼女のお家が物凄く大きかった事です。家を案内してもらい、地下室やシアタールーム、トレーニングルームも見せてもらいました。トイレとバスルームは5つもあるそうです。ダイニングテーブルは普段用とクリスマスやお誕生日などのお祝いする用があり、大きなソファも幾つもありました。日本とは桁外れな全ての物に驚いてばかりでした。2泊という限られたなかで、ご家族と一緒に家で過ごす事はあつという間でしたが本当に良くしていただきました。



St. Marys 市では皆さんの温かさを感じました。こうやって温かく市全体が私たちを迎え入れてくれるのは姉妹都市としての絆が途切れることなく、しっかりと守られてきているからだと思えて感じ、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

St. Marys 市を出発し、日本時間の10月31日午後から11月2日までデトロイトに滞在しました。デトロイトでは姉妹図書館のウェストブルームフィールド図書館や教育機関、病院、在デトロイト日本国総領事館などを訪問させてもらいました。

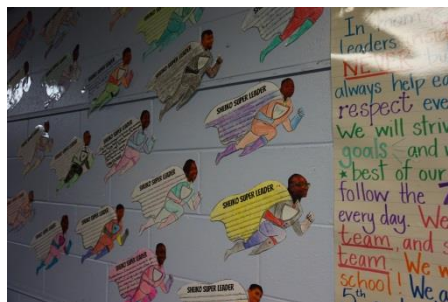
ウェストブルームフィールド図書館に着いてすぐ歓迎行事がありました。テーブルに日本人は加藤さんと私だけでした。たくさん話しかけてくれて嬉しい反面、凄くドキドキして簡単な単語での会話しか出来ず、加藤さんに助けを求めてばかりいました。美味しい食事にお腹一杯になって「Too much!!!!」とアピールすると Carol さんという素敵な方が「OK! Let's go!!」と言って図書館の中のキッズコーナーを案内してくれました。このコーナーは図書館なのに図書館らしくない、でもまた来たいと思える素敵な場所でした。本だけではなく、劇をするなど各々が自由に時間を過ごせるプレイルームもありました。図書館というよりコミュニケーションをとる場所という印象でした。色使いもカラフルでワクワクしました。まだ出会って30分程しか経っていませんでしたが、凄く素敵な場所に興奮した私は Carol さんと一緒に劇をし



て、プレイルームでも楽しい時間を過ごしました。言葉は少ししか通じなくても十分にコミュニケーションをとる事ができました。

また私は大学卒業後、保健体育の臨時講師として中学校で働いていた事もあり、教育機関への訪問はとても楽しみでした。学校訪問をさせてもらい驚いたことは、校舎内の雰囲気です。校舎の中には、たくさんの掲示物で飾られた廊下や教室、そこで楽しそうに過ごしている教師や生徒、音楽をかけながらの授業やバランスボールを椅子にして行われている授業など衝撃的なことがたくさんありました。

目で見て感じた事だけではなく、肌や耳でコミュニケーションについても感じました。「さすがアメリカ！」と思いました。廊下をすれ違うだけなのに生徒同士はもちろんの事、教師と生徒、教師と教師、校長先生と生徒までもが同じように挨拶をし、握手やハグを「Hi」「Hello」「How are you?」



と言って接していました。それは学校の中だけではありませんでした。街の中でも同じでした。これはデトロイトだけではなく St. Marys 市でも同じでした。きっとアメリカでは日常的な光景だろうなと思いましたが、日本人の私にとっては非日常的な光景でした。知らない人には挨拶しない、日常的にハグや握手など人に触れるなんてのもってのほかです。用事のある時に話をする、それが当たり前として育ってきました。廊下や街ですれ違うだけでこんなにも人と人が接する機会があるのか、こんなに話すことがあるのかと、初めて知りました。今まで当たり前だと思い、育ってきた自分に少し恥ずかしさも覚えました。それと同時に日本は冷たいのかな、と感じました。そんな事を考えていると、校舎や街で会う人たちは普段と同じように、初めて会う私たちに対しても変わりなく同じ言葉をくれました。そして私たちも同じように「Hi」と返す事が出来ました。今まで当たり前と思っても違うと感じたのなら、そこから変えていけばいいと教えてくれているかのように思いました。誰が良くて誰が可笑しい、悪い、そんな事ではなく、みんなが自分の事を好きで楽しそうにしている、街や学校を共に愛している、相手の事を理解しようとするコミュニケーションを取ろうとしている、自分を表現している・・・たくさんの事を肌で感じました。素敵だなあと憧れを抱きました。そんな素敵な人になるために何か特別な取り組みがされているのではなく、授業1つにしても自分が選択して先生が待っている教室へ行く事や自分がどうなりたいたいのかを自分で選ぶ事で自立し、しっかりと目標を持つ人間に育っていくという背景を見ることも出来ました。気づいた頃から、

自分を持っているからこそ自己主張をしっかりとして今の姿になっている事にも感動しました。ぶれない自分自身の軸が出来上がっているんだなあと思いました。また、校舎内に職員室は見当たらず、各教室に教師が居て生徒がそれぞれやって来て



ていました。だから廊下など校舎内で生徒と教師が常に触れ合う事が可能だったのです。そうする事で教師と生徒の距離は近くなるのはもちろんの事、教師も生徒の雰囲気や様子

を常に感じる事が出来ると思います。生徒も教師が常に近くにいる事で相談や質問などがしやすい環境にあると思いました。

色んな場面や光景を見る中で、私は自然と日本とアメリカの教育についてもっと詳しく知りたいと思いました。例えば、ホームルーム教室についてです。日本では、文化祭や体育会・修学旅行・クラスの中での班活動など、クラスで動くことが多いです。日常的にクラスメイトとのやりとりがあって日々少しずつクラスが団結していきます。しかしアメリカにはホームルーム教室という概念があまりなく生徒が教師の待つ教室へ行くのが普通でした。クラスというよりも「個人」という印象でした。それはアメリカには日本という飛び級制度があるからなのかもしれません。日本とアメリカの教育について、どちらが良くてどちらが悪いのかではなく、それぞれの国で良い部分は真似をして色んな可能性を広げていけると良いなと感じました。



また、校舎や街の中には学校名や街の名前の書かれてある服やグッズを身に付けたりと、自分の母校や故郷を忘れることなく大切に思う気持ちを表現する機会がたくさんありました。各家庭や建物には必ずと言って良い程、アメリカ合衆国の国旗もありました。こんなにも自分の国・街・人・・・たくさんものを愛し大切にしている「アメリカ合衆国」に私は感動しました。

いざアメリカへの5泊7日間の旅が始まると、本当にあつという間でした。1人では食べ切る事の出来ないようなたくさんの食事・大きな家・大きな車・澄み切った空気・野生のリスなどの動物・色んな人種の方が共に生活していたこと・出会った方々のあたたかさなど、どれも新鮮で自分自身の表情が次第に柔らかくなっていくのが分かりました。言葉は鮮明に通じなくても、温かく迎えてくれた現地の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。姉妹都市・姉妹図書館だけではなく、教育やスポーツ、人種についてなど「アメリカ合衆国」という国についてよく知る良いきっかけとなりました。

今回このような企画を市民にも提供して下さった淡路市長さん、市役所の皆さん、NPO法人淡路市国際交流協会の皆さん、関係機関の皆さんのご支援ご協力で私は無事に日本へ帰国しこの報告書を書くことが出来ています。もちろん賛成し送り出してくれた家族や応援してくれた友人にも感謝の気持ちでいっぱいです。ハードなスケジュールではありましたが、個人旅行では決して経験する事の出来ない大変貴重な経験をさせてもらいました。見てきたもの、肌で感じた事、耳で聞いてきた事、心で感じた事、全てを宝物にしたいと思います。そして姉妹都市・姉妹図書館それぞれの場所で私たち淡路市の事を家族のように受け入れ、誇りに思っているのだと感動した気持ちは一生忘れません。



これからの淡路市にしっかりと繋いでいけるよう交流を大切にし、たくさん私自身も学び実りのあるものにしていきたいです。

姉妹都市提携を結んで30年、当時私はまだ生まれていません。しかし、今回の旅を通じて絆の強さを実感しました。津名郡北淡町から淡路市へ変わった部分はあったのかもしれませんが。変わったものと変わらないもの、より濃くなった絆、しっかりと守ってくださった淡路市に感謝の気持ちでいっぱいです。次の時代へとしっかりと繋いでいけるよう市民として出来ることを、淡路市をもっとよく知りもっと伝えていかなければならないなあと実感しました。

そして帰国後、祖母の家へお土産を持って訪ねると泣いて喜んでくれました。「アメリカの St. Marys」の人が当時私にくれたのと同じ、アメリカの小さな国旗を祖父の仏壇に供えました。

今回の訪問団に参加させていただけた事に心から感謝致します。本当にありがとうございました。

広く続く緑の草原、その中に見える白い建物、まっすぐに長く伸びた道、デルタの飛行機の窓から見た景色に、私はその地に降り立つ前に感動を覚えました。

ここがアメリカ、オハイオ州セントメリース市！頭の中でその言葉を繰り返しました。



東浦事務所を朝 7 時半に出て丸 1 日、アメリカが広いことは地図や地球儀でわかっていたものの、セントメリース市が山もない地平線と、整然としたこのように美しい街とは来るまで知りませんでした。

デトロイトまでの 11 時間 40 分の機内では、隣に座ったアメリカ人に無謀にも突然英語で話しかけて「？」という顔をされたので、あわてて隣席の通訳リカさんに助けを求めると、私をはさんで、二人で流暢な会話が交され、彼が仕事でネパールに行き、ミシガンの自宅に帰るところだとわかりました。

ちょっと英語の練習相手にと考えた私の思惑はずれ、あとは日本映画を 3 本観て泣いたり笑ったりし、寝たり起きたりを繰り返し過ごしました。



到着して最初の食事で水やジュースのグラスの大きさにびっくり。日本ではグラスが大きくても半分氷が入っていて飲めばすぐなくなるのに、こちらは飲んでも、飲んでも減らないジュースにまずアメリカの大きさを感じました。さらに盛られた料理の量も多くて、とても食べ切れない。



次からは料理の皿数を小さく注文して、何人かで分ける知恵でおいしく頂くことにしました。

ホテル到着は夜の 10 時、朝家を出て 27 時間、時計をデトロイト時間にして眠りました。ホテルの朝食はバイキングです。パン、フルーツ、ヨーグルト。これは日本の現代的朝食！？

街並を走ると機内から見た通り緑が多いです。公園はもちろん、家々の庭が広く、芝生や大きな木が植えてあるからでした。機内から見た白い建物は実は大きな家でした。それに家に塀や囲いがなくて余計に広く見えるのでしょうか。

市役所の歓迎式では明るくなごやかな印象を受けました。

私と会うのは皆さん初めてなのに、使節団の一員というだけで古くからの友人のようにフランクに接して頂き、私も緊張するということがありませんでした。

特に和歌の額が逆さまに置いてあるのを指摘しても、大きな声で笑いながら直して、それを皆に言ってまた笑い合っていました。このなごやかさが友好都市を続けてこられた成果と感じました。もちろん、日本から贈られた着物などは目立つ所にきれいに飾られていました。そのあと散歩したメモリアル公園でもこの地の人々がこの姉妹都市交流を大切に

していることが伝わってきました。

この度の旅行の一番の楽しみはホストファミリー宅の滞在です。

Eberle 宅は、やはり広い芝生の庭があり、地下もあって 2 階建ての広いおうちでした。家族は Mike・Jenny 夫婦に Brad と Breanna の 17 歳の双子と 7 歳の Jessie です。

Jessie は初めて会った時に歓迎の意を表した手紙をくれました。私は Jessie の部屋を借りたので、可愛いおもちゃいっぱいの中、ハローキティのベッドで寝ました。

楽しい朝食は、Jenny がオーブンで卵を使って大きなオムレツを焼いてくれました。色々な種類のパンも用意され、夫の Mike が飲み物は何がいいかと聞いてくれたので、”Milk Please”と答えると、牛乳をコップに入れて持ってきてくれました。

みんな一緒に食卓について、なごやかでおいしい朝食でした。



その夜の歓迎夕食会では、その前に着替えに戻る時間があつたので着物を着ました。日本らしい景色の柄の着物を神戸で見た時、是非アメリカで着たいと衝動買いした物です。一人では着物を着ることができないので、着物の仕立ての仕事をしていた友人に頼み、身上げして頂いたおかげで着ることができました。私が着替えたのを見た Jessie がハローキティの浴衣に着替えました。暖かい日でしたので大丈夫でした。お揃いをとても喜んで可愛かったです。夕食会に参加して頂いた方々にも近くに来て挨拶して頂き良かったです。



セントメリースを離れる前の昼食はデイトン空港へ行く途中でしました。

Bob Evans という店に入り、メニューを見て注文を考えていると、ずっと付き添ってくれたスーザンさんが声をかけてくれました。

「アメリカを代表するこの店の食事を是非体験して欲しかった。飛行機に乗る為に時間的にはあまりゆっくり出来ないけれど、味わって下さい。」

それを聞き、そんな気持ちで私たちの食事と店を選んでくれていたことに気がきました。忘れないよう出てから店の写真を撮りました。お世話になりました。



見学、訪問先ではどこでも専属の人に案内して頂き、とてもわかりやすく丁寧に説明して頂き、通訳の方にも付いて頂いたのだから知らないことばかりでしたが勉強になりました。

ニール・アームストロング宇宙博物館では、宇宙を目指したアメリカとソ連の人達との比較や宇宙服、宇宙船の展示もあり、自分には縁遠い世界と思っていましたが、興味深い話が多かったです。



ライト州立大学では、珍しい化石をいくつも見せて頂きました。そして、建物がガラス張りなのは不審者が入った時にその行動を見やすくする為と聞き、防犯に対する日本との考え方の違いをはっきりと感じました。日本では高い塀などで不審者を入りにくくするというのが一般的な防犯の考え方であると思われるからです。この発想は随所で見られました。

ロデオは迫力がありました。8秒以上馬に乗っていないと失格ということも知りました。ホストファミリーの方も初めて見たということでした。

要塞跡地ではアメリカが戦いの歴史であるという勇ましい、また悲しい話を聞きました。色々の人種がいるからこそ大らかであり、また差別も残るとい、日本とは別の問題をかかえていることを感じました。

教会の見学をして感じたことは、人が信じるセイントは数々あるということです。人種も多いためか教会の数も多く、祀られている神も違うということによってそれによる争いがあるというのは哀しいことです。

ビール醸造所ではタンクまで見せて頂き、丁寧に説明して頂きましたが、下戸なのでお菓子のつまみだけ頂きました。

高校訪問では朝お別れを言ったばかりのホストファミリーの双子と会えて、ステージも見ることができて楽しかったです。広い体育館では少しバスケットもさせて頂きました。

ウェストブルームフィールド図書館は広くてコミュニティセンターとして作ったというだけあって、親子で2、3時間遊んだり、友人とゆっくり語らいながら過ごしたりできる場でした。それぞれ思い思いに過ごすことができるスペースが作られていることは素晴らしいです。それ以上に感動したのは、見学のあと「東浦の図書館は狭いし蔵書も少ない。」と言えば「東浦の図書館は素晴らしい。ここも最初は同じ位の規模でした。」とすぐに言ってくれたことです。自慢だけでなく相手を認めるという懐の深さを感じました。

小学校では肌の色、髪の色、目の色、そして服の色も違う子供たちがバランスボールに座って授業を受けているのが全く自然で楽しそうだったので、つい「ハイ！」と声をかけました。すぐに「ハイ♪」と返事があって、自由な雰囲気を感じました。

移民や親の仕事の都合で来て母国語しか話せない子の為の英語教室もありました。

高校では教室に万国旗がいくつも飾られていて、ここはアメリカと言うより世界があると感じました。



ヘンリー・フォード病院は薬の匂いのしない病院の中に街があるという発想で作られていました。それに、予防医学に重点を置いている為、レストランも新鮮な野菜が豊富に置かれていて、温室やフィットネスの部屋、散歩できる緑のオアシスまでありました。

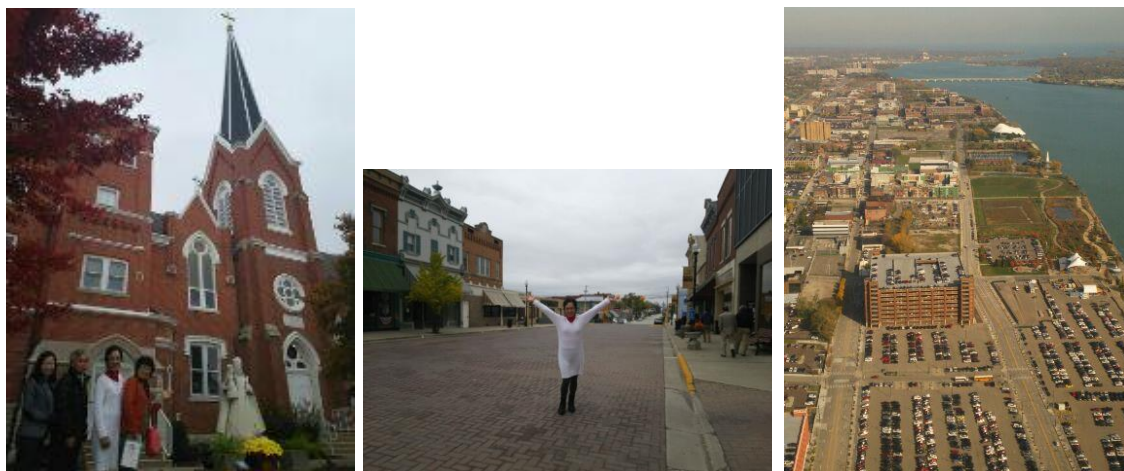
これから病院に対する考え方もこんな風が変わっていくのだろうと思わせる先進的な建物でした。病院に行くのは嫌という子供たちも減るのでしょうか。

この度、先進的な建物などの見学の他に、ダウンタウンを復活して整備しようという動きがあることにも大変親しみを覚えました。

GM ルネッサンスセンターの 72 階からの景色は圧巻でした。

在デトロイト日本国総領事館の和田充広氏にはミシガン州の資料も用意して下さり、親しくお話を伺うことができました。「人との違いを認める」「自分は自分と意識する」ことが大事と言われました。これは日本に於いても大切な心構えであると思われます。

このミシガン州には日系企業も多く、日本人が 13,000 人以上居住されていることを教えて頂き、アメリカがぐっと身近に感じられました。



この一週間で自分の中で不思議だったのは、日本では毎朝食、米の御飯と魚だったのに渡米中一度もそれを食べたいとは思わず、持っていった大好きな日本茶も一度も飲みたいと思わなかったことです。米国で頂いた料理はどれも大変おいしかったです。日本茶を用意して頂いた所もありますが、その食事には合わず、おいしいとは感じませんでした。その国、その風土に合った食事がおいしいのでしょう。

それにしても、日本は短い間に家庭のトイレも殆ど洋式で、台所はキッチンとなり、食卓はイスになり、寝るのはベッドで畳のない家も多くなっている現状で、いつアメリカに行っても困る人はいないことでしょう。靴を玄関で脱がないのは戸惑いがありました。…

これから私は世界のことに目を向けることはもちろんですが、それ以上に日本と淡路市のことについて学び、その将来について考え、いつ外国の方が来て質問を受けても答えられるようにしたいと強く感じました。今まで通りホストファミリーとしての受け入れを続け、10年後に Jessie が来た時には私の家で泊まり、共に行動したいです。Jessie と別れる時に手紙にその事を書いて渡しました。またひとつ夢が実現できると嬉しいです。

そして、綺麗に部屋を片付けて迎えるのではなく、ありのまま自然の生活を見て頂くことの方が末永いお付き合いができると感じました。私がセントメリースの中にアメリカを見ようとしているように、友好親善使節団として来る彼らも淡路市の中に日本を見ようとしているでしょう。もう30年も続けてこられた関わった方々との努力は素晴らしいです。これからは普段着の付き合いをすることもいいのかも知れません。金糸の着物は贈られているので、すぐに着られる浴衣を贈るのは如何でしょうか。それに、淡路島内だけの案内でなく、淡路島と同じ大きさの琵琶湖に行ったり、阿倍野ハルカスから淡路島を見たりという発想も楽しいでしょう。津名港から船が出るようになったら、それに乗って行くのもいいでしょうね。5年後10年後、彼らも淡路市も変わっていくことでしょう。

この度の使節団の団員相互仲良く、皿の食事が多すぎて食べきれない時は小皿をもらって皆で分けたり、時間待ちの時は荷物をまとめて置いて交替で買い物をしたり、車内では冗談を言い合ったり、いいメンバーで楽しかったです。

部長たちはそれぞれのお役目の視察、秘書課の加藤さんと徳梅さんは次の段取りと切符手配と通訳など忙しく、気も体も遣われてお疲れになったこととお察し致します。私は一般参加させて頂いたことに、関係者の皆様に感謝すると共に、大事なく帰って来られたのも、同行して頂いた皆様のお陰でございます。

若い人達、また年配の方々にも、この経験を繋いで頂き、この友好使節団の事業が続き、人と人との交流が国と国の友好にも役立つことを願っております。

この経験は忘れることはできませんし、今後活かしていきます。ありがとうございました。